

長江のさきっぽ

チベットから長江を下った長い旅の終点に着いた。
ここは、河口の先にある大きな中洲・崇明島。
のどかなこの島にも大きな変化の波が打ち寄せていた。

最終回 崇明島
長江
を行く



た記憶があった。それでは長江の本流が海へ流れ込む地点はどこだろう。「上海市内の河は支流ですから、海への出口に近いのは崇明島ですね」と通訳の季丹がいう。「再び地図に視線を走らせると、上海の市街地から北東の方向に大きな島みたいなものがある。崇明島というのはここらしい。長江の

流れにはさまれているから、正確には中洲だな、と断じてみたが、相当な広さである。調べてみると、崇明島は中国で三番目に大きな島で、中洲としては世界でもっとも面積が広い。長さは東西76キロ、南北の幅は十数キロというから、河の中に土砂が堆積してできた陸地とは思えない大きさだ。上海か

らは連絡船で行くらしい。私たちは外灘の宿の前でタクシーを拾って船着場に向かった。車中、季丹と島の話をしていたら、運転手が会話を割り込んできた。まだ30歳そこそこの気の良い運ちゃん、崇明島の出身だという。「島じゃ、いい仕事がなくってね……。日本企業の工場もあるけど、経済はまだまだ遅れている」

運ちゃんによれば島には三つの特徴がある。カニがたくさん捕れること、葦の生えた風景が美しいこと、そして島の形が常に変化していること。巨大な商業都市・上海のそばにありながら、動植物などの生態系は破壊を免れているらしい。

上海から崇明島までは高速船で約45分。帆船で往来していた清の時代は、逆風だと7、8時間もかかったという。このことだけでも河口付近の長江主流



市場で売られるカニ。汚染や乱獲で天然産は激減した

とうとう上海までやって来た。感慨というほどのこともないが、チベットから長江を延々と下ってようやく河口までたどりついたというわけだ。上海の宿で中国の地図を広げながら、長江の流れを指でなぞってみれば、やはり数千キロの旅を終えたという、それなりの思いも込みあげてくる。

さて、旅の締めくくりをどこにするかな、と上海市内図を眺めながら想いをめぐらせていると、市内から実際の河口までは相当な距離があることに気がついた。……そうだったな。ちょうど20年ほど前、香港から錦江号という船で上海を訪れたとき、濃い朝もやの中を内陸へだいたい遡江してから下船し

の大きさがうかがい知れる。実際、河というより海を渡る気分である。崇明島では長江の岸に沿いながら、島を半周してみた。運転手兼ガイドの鄭さんは、「島の東側は渡り鳥の休憩地として国際的に知られています。シベリアからオーストラリアへ移動する渡り鳥たちがこのあたりで羽を休めるのです」と、この島の自然は世界に誇れるものだという。

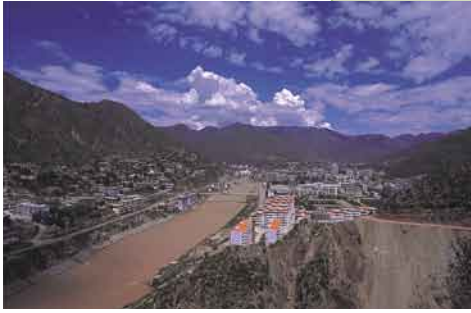
「水も土も空気もきれいだから、島の平均寿命は76歳。『長寿の島』と呼ばれています」

ただ、住民たちと話をすると、やはりここでも地域の将来をめぐっては二つの議論がある。一つはどのような代償を払っても、まず工業化を進めて生活を豊かにすべしというもの。他の問題はカネができてから解決すればいい。経済の発展を何よりも優先すべきだ、という主張がある。それに対して、素晴らしい自然環境を積極的に活用しながら、この際、「工業文明」を飛び越え、もっと高度な「生態文明」を目指すべきだという意見がある。工業化が遅れている崇明島だからこそ可能な選択なのだ、という指摘である。鄭さんは、工業優先派の唱える「島

野中章弘
1953年兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるリポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」「絆と絆」など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表

▶崇明島の漁民たち。島の若者たちは後を継がず、都会に出て行く者も少なくない。▼上海や近隣の島を結ぶ海底トンネルや橋の建設現場。便利になっても、崇明島の自然や文化を損なう怖れもある





旅の起点となった東チベットのチャムド(昌都)。一妻多夫など興味深い慣習の残る地域だった



河川交通の要衝・奉節。三峡ダム建設により、この街は水に沈む。住民の多くは移住せねばならない



長江の流れと海が融合する地点。はるか向こうまで大海原が広がる(崇明島の東側)。これが長江のさきっぽだ

経済発展の大奔流に生きる

民が裕福でなければ、生態系の保護など机上の空論となる。経済的な土台の弱い社会では、生態系の議論など無意味なものだ」という意見に賛成である。

「ここじゃ食えないから、若い者はみんな島を出ていっちゃう。むろん私だって『自然』でメシが食えればそれに越したことはないと思いますけど」

崇明島関連の雑誌記事を拾い読みした限りでは、生態系活用派の主流は島外の専門家たちである。住民たちへの説得力はまだ弱い。

ただ、行政は住民の生活向上と生態系活用とを両立させるプランを練っているらしい。2年前、2020年総合開発計画案を公募したところ、企画の文書に太文字で書かれていたのは「先端技術」「森林公園」「生態コミュニティ」「リゾート開発」などという言葉である。行政が公表した四つの計画のうちでもっとも注目を集めたのは、「テーマパーク」だという。近い将来、上海などと海底トンネルや橋で結ばれば、大都市郊外型テーマパークは実

現可能なビジョンとして現実味を帯びてくる。公害などのリスクを伴う工業化を図るより、テーマパークの方が「上等な」選択に思えるらしい。

「私たちはもうちよつと楽な暮らしができたらなあ、と望んでいるだけです。あんまり大きなことを言われても、ピンときませんね」

鄭さんの長男は職を求めて上海へ出て行ってしまった。一見のんびりとした島の生活は決して豊かとはいえないが、せめて家族は一緒に暮らしたいと鄭さんは願う。

私は崇明島を回りながら、この島で起きていることはこれまで長江流域で見聞したことと同じだなあ、と改めて思った。破竹の勢いで経済を發展させる中国とその流れに取り残されまいと必死でもがく人びと——その光と影のまだら模様はどの地域でも複雑な陰影を人びとに投げかけていた。

長江源流のチベットから上海まで、中国を横断する旅は、良くも悪くも等身大の中国の姿を目撃する貴重な機会となった。経済の豊かさや人間の豊かさ、それらを両立させるため、中国五千年の知恵をいまこそ活かしてほしいと思うのである。